



ろうそくや灯油は、どのようにして燃えるの

固体のろうが気体になって燃える

ろうそくは、パラフィンや木ろう、みつろうなどから作ります。パラフィンは、石油から、木ろうは、ハゼノキの果実から作ります。パラフィンや木ろうに直接火をつけても、燃えません。しかし、この中に「しん」を入れて、そのしんに火をつけると燃えます。

ろうそくは、パラフィンや木ろうなどを棒のようにして固め、その中心に、しんになるひもが入れてあります。しんに火をつけると、まわりのパラフィンや木ろうが、熱でとけて液体になり、この液体のパラフィンや木ろうが、さらに熱で気体になって燃えます。

ろうそくが燃えているときは、ろうが温められて液体になり、ろうそくのしんをのぼっていきます。しんをのぼったろうは、ろうそくの火によって、さらに温められて気体になり、その気体がほのおになって燃えます。

液体の灯油が気体になって燃える

灯油は、石油ストーブの燃料として使われています。灯油は液体ですが、燃えるときはろうそくと同じように、気体になってから燃えます。石油ストーブは、しんに灯油をしみこませていて、しんに火をつけると、灯油が気体になって燃えます。

ガソリンは灯油とちがって、たいへん気体になりやすい液体なので、しんがなくても気体になります。もしも、ガソリンを灯油とまちがえて、石油ストーブに入れて火をつけると、いっしゅんにして燃えるので、たいへん危険です。（監修・青木 国夫）

